

山田昌弘『新平等社会』

2章 格差に関わる社会問題を考える際の 五つの領域

要点のまとめ

格差拡大の実態と社会問題の観点

- 格差は個人だけの問題ではない
- ある一時点の個人の収入だけを比較して格差を語ってはいけない
- 人間は「時間的」「空間的」広がりをもった存在
そのライフステージによって収入源は異なるし収入格差の意味も異なる
- 今、格差が問題になっているのは、生涯の仕事と家族のあり方が根本的に変動し、個々人の収入格差が、個人の将来生活と家族のあり方に影響を及ぼす度合いが大きくなっているから

新たに出現している格差拡大 五つの領域

①「上離れ」と「底抜け」の問題

②ライフステージの問題

就職期、子育て期、高齢者での格差の意味

③生涯格差 格差が一生継続するののかという問題

④格差の再生産の問題

⑤地域格差の問題

①「上離れ」と「底抜け」の問題

- 「上離れ」=今まで以上に高い収入を稼ぐ人が出現すること
- 「底抜け」=収入が低く、生活に困難をきたす人が増えること
- 社会全体の不平等が高まっても、それが「上離れ」によるものなら、それほど問題にすることはない
- しかし、格差拡大に「底抜け」が含まれているなら、社会的影響は深刻

次の四つの分野の底抜けに注目

1. 低収入の若者の出現
2. 夫の失業、収入低下によって中流の生活が維持できなくなった家族
3. 離別母子家庭の増大
4. 貧困高齢者の底抜け

- これらの「底抜け」は、家族の経済的支え手だった男性の収入が低下するリスクが増大し、中流生活が維持できない家族が増えることから生じている
- 中流生活を築く見適しがもてない若年者、中流生活から転落しそう／転落してしまった中高年が確実に増えている
- 彼らは「努力しなかった人」ではない、努力しても報われなかった「偶然の被害者」であることが多い
- 「底抜けのリスク」の増大 → 格差拡大への不安を増幅

②ライフステージの問題

- 人の一生のうちには格差が問題にならない時期もあれば、小さな格差も大きな問題になる時期もある
- 格差に対して脆弱な三つの時期
 - 就職期
 - 子育て期
 - 高齢期

就職期

- 学卒後数年間の時期(概ね15～25歳位まで)
- 職業人生のスタートライン:ここでの格差は、その後の一生の人生の格差につながってしまう可能性が高い
- ここ10年で若年者(男性)の収入格差が拡大
- ジニ係数の推移をみても、男性で20代前半の伸びが著しい

- 1990年頃まで: 男性であれば学卒後すぐに正社員になることができ、その初任給には大きな差がなかった
- ここ10年の間: 能力ある若者なら稼げるようになった一方で、非正規雇用が増大し収入が低くとどめ置かれる若者が増えている
- 日本経済が大量の非正規雇用を必要とする経済に転換したため、若者を選別処遇している
(先進国に共通の現象)

子育て期

- 10代後半から30代の、子育て世帯の格差
- 子どもの存在は「長期負債を背負い込む」こと：
将来予想される教育費の負担まで考慮しなくてはならない
- 機会費用の問題：育児に時間がとられるため、お金を稼ぐ労働時間の減少や、仕事の中断、昇進や能力開発機会を逃すなど、様々なハンデが生じる。

- 子育て世代の経済格差の拡大・二極化傾向
 - フルタイムの共働きで相当収入がある両親、若くして高収入を得られる父親、祖父母の経済的支援が得られるケース
 - 父親の収入が減少したり、フリーターに子どもが産まれたり、離別母子家庭となるケース
- 「上離れ」はともかく、「底抜け」の場合は、親の生活に打撃を与えるだけでなく、子どもの将来に大きな格差をもたらす
- 子ども期の格差が再生産される原因にもなる

高齢期

- 退職後の高齢者は自分の努力で「収入を増やす」手段がほとんどない
- 病気や要介護状態になるリスクが大きくなる時期でもある
年金、介護などの社会保障の役割が重要になる

- 資産があり年金額も十分な高齢者なら余裕のある生活を送ることができる

私的な保険というリスクヘッジもできる

- 資産がなく年金も不十分で、子どもの支援も期待できない高齢者は、病気や要介護状態になってしまうと、生活困難に陥る危険が高い

このような「底抜け状態」の高齢者が増えている

③生涯格差

格差が一生継続するののかという問題

- 現在、非正規雇用に使っている若者が多い
 - 非正規雇用から正規雇用に移る割合は低下
 - 逆に、正規から非正規に移る割合が高まっている

- 日本では新卒一括採用をする企業が多い
一度、正規採用から外れてしまった人は、なかなか正社員になれない
- 生涯正社員の場合と、生涯パートタイムの場合の年収格差は約4倍
- 正規から外れた人は教育訓練を受ける機会や将来生活の展望がもちにくい
- このまま若年フリーターを放置すれば、結果的に、生涯所得格差が大きく広がるだけでなく、将来豊かな生活を築いていくという希望を失う可能性も高いだろう

④格差の再生産の問題

- 社会全体の活力を考えれば、格差は世代的に再生産されない方が、はるかに活性化した社会ができる
- 一方、近代社会にも「親子の情」が存在している
 - 自分の子どもには将来よい生活をさせたいという親の感情
 - 上位の人は「個人的には」格差の再生産を望む

世代的再生産の三つ要因

1. 親が直接、子に資産を贈与、相続させて、子に経済的資産をもたらすもの
2. 親が教育投資を通して、子の職業的成功を導くも
→ 学力を伸ばすチャンスに差がついており、これが、将来の収入格差につながる可能性が大きい
3. 親の文化的環境が子どもに影響を与え、社会的成功に必要な知識や資質、意欲が相続されるもの
（「インセンティブ・ディバイド」）
→ 格差の世代間再生産が固定化する

⑤地域格差の問題

- 経済状況は地域によって異なる
- ここ10年で地域間格差が大きくなっている
- 日本社会で出現している三種類の地域格差
 1. 都道府県やブロック単位で見た地域間格差
 2. 地方内部格差(活性化している市町村や地区／過疎に悩む市町村や地区)
 3. 大都市内部格差(大都市の内部での地域間格差の進行)

- ビジネスチャンスがあり発展している地域は活力のある人を集め、停滞している地域からは活力のある人が逃げていくことによって、拡大再生産され、地域のつながりにも影響を与える
- これらの変化は、個人や家族の所得格差と同じく、新しい経済構造の転換に伴って生じている
- IT化、車社会などの到来による技術革新と、人々の移動性向の変化という要因が考えられる(4章で論じる)